

広陵町の民話



「親から子へ、子から孫へ」

「地域の高齢者から若者に」

時代を越えて語り継がれる民話

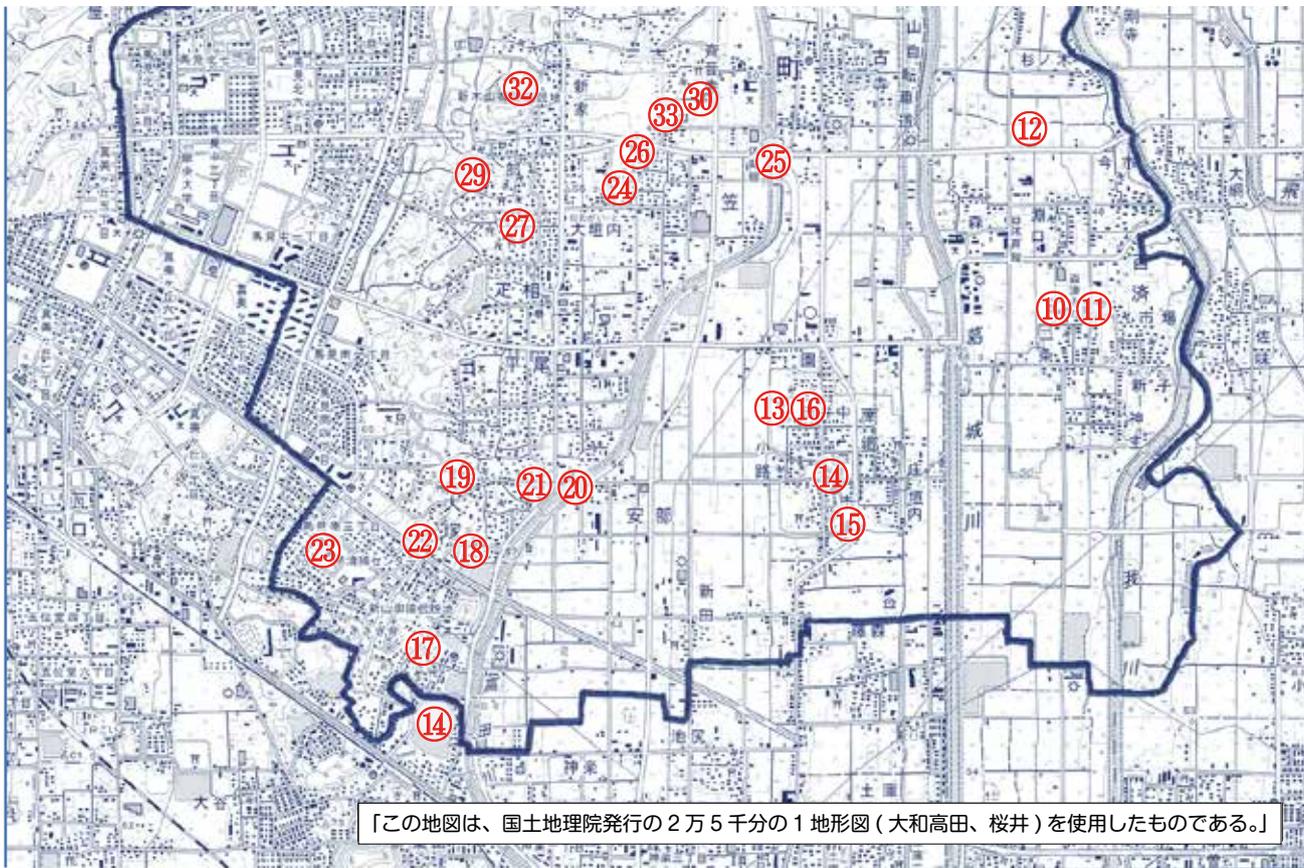
この冊子は「広陵町史」（昭和四十年発行）に記載されている広陵町の伝説の中から抜粋し、一部見直しを行い編集したものである。

記載の内容には事実を確認できないものもあるが、今となっては真偽を確かめる術はなく、できるだけ原本に従って編集した。昔から地域で語り伝えられていた「伝説」としてお読みいただき、伝説の地が時代とともにどのように変わってきたかを写真によりお楽しみいただければ幸いである。

写真は、広陵町社会教育委員が平成二十六年に撮影したものを主に使用した。

「広陵町の民話」目次

- ① 大場の弁財天(大場)
- ② 赤坂の古戦場(大野)
- ③ 庄屋長五郎(沢)
- ④ 雨乞い地蔵(菅野)
- ⑤ 広瀬大明神(広瀬)
- ⑥ くさ神井戸(弁財天)
- ⑦ 弁財天(弁財天)
- ⑧ 権現狸(寺戸)
- ⑨ おんどり(寺戸)
- ⑩ 百済の宮(百済)
- ⑪ 梵字の池(百済)
- ⑫ 黄金堂(百済)
- ⑬ 蛙鳴かすの池(南郷)
- ⑭ 南郷どん(南郷)
- ⑮ 若殿塚と奥方塚(南郷)
- ⑯ 弘法井戸と雷(南郷)
- ⑰ 六道山と後藤又兵衛(大塚)
- ⑱ 相撲太鼓の鳴る所(大塚)
- ⑲ 雷が落ちない所(安部)
- ⑳ 中将橋(安部)
- ㉑ 中将地蔵(安部)
- ㉒ 仏ヶ谷(安部)
- ㉓ 鐘畑(安部)
- ㉔ 伝正寺(笠)
- ㉕ ナデンコの花(笠)
- ㉖ 八嶋神社(笠)
- ㉗ 夢想の地蔵(大垣内)
- ㉘ 千本櫃(赤部)
- ㉙ 麦粉池(赤部)
- ㉚ 安産の神様(斉音寺)
- ㉛ 巢山の神木(斉音寺)
- ㉜ 大塚の大蛇(斉音寺)
- ㉝ 麦飯胄宮(斉音寺)
- ㉞ 徳川家康からもらった檜(新家)
- ㉟ 讃岐神社と竹取翁(三玉)



「この地図は、国土地理院発行の2万5千分の1地形図（大和高田、桜井）を使用したものである。」

①大場の弁財天（大場）

巖島神社は市杵島姫命を祭る。俗に弁財天とい
う。箸尾の弁財天女の御子さんを寛永二十年癸未
の歳に分座して奉祀したといわれる。それで大正
十三年十月三十一日その三百年祭を行い、神殿・
玉垣・鳥居・狛犬などを改修した。三、四百年ぐ
らいを経た檜の大木もあったといつ。



巖島神社

② 赤坂の古戦場（大野）

赤坂の墓地のある辺りは、昔の古戦場であった。〃箸尾どん〃すなわち箸尾ためまさ為政たけまさが天文十六年の五月に筒井順昭と戦って敗れ、為政は殺されて箸尾城はこぼたれてしまった。この赤坂山の古墳から朱が沢山掘り出されたので赤坂山という名がついたといふ。

広陵町史（平成十三年発行）によると、箸尾為政は「天文十五年二月、薪能に参加したところを筒井順昭によって順昭の宿坊であった成身院に誘い出されて打ち殺された」とされている。



寺戸北付近から赤坂山を望む



馬見丘陵公園から赤坂山を望む



箸尾城址の碑

③ 庄屋長五郎（沢）

今から二百年ほど前の宝暦年間（一七五一～一七三三）に沢に庄屋の長五郎という傑物けつぶつがいた。当時、沢は北沢と南沢とに分れ里と里の中間を字里中といった。ここは聖徳太子が愛馬に乗られて、飛鳥から法隆寺へ通われたと伝えられている道筋でアヤメの花で名高い土地であったが、しかし沢は字の如く低地で度々の洪水に悩まされた。長五郎は庄屋になってから意を決し、祖先伝来住みなれた土地を捨てて高地へ村ぐるみ移転を企てた。山地を開墾し、六十何戸を碁盤の目のように五筋の道路で区割し、三畝ずつの屋敷を等分に分配して宅地とした。そして方角によって辰巳・乾などの苗字をつけた。随って新村落は傾斜はあるが高所で、見晴らしがよく田畑の悪水は下方へ流れ永久に洪水の心配はなくなった。しかし長五郎は晩年、ある事件に関係して牢死し、その子孫は断絶してしまった。村の古地図に僅か庄屋長五郎の名をとどめるに過ぎない。明治四十四年六月北葛城郡長になった和田常太氏が庄屋長五郎の事跡および伝記を調査したが判明しなかった。今はただ伝説として石碑こゝいに残っているだけである。



南北の真っ直ぐな通り



東西の真っ直ぐな通り



白山神社



春日神社

④雨乞い地蔵（萱野）

村の西端、東向きの大らかな堂の中に六字名号碑がある。これを地蔵尊として拜んでいる。雨乞いの時は石地蔵を背負って村中へ持って廻ると、必ず雨が降った。ところが、いつの間にかその石地蔵が消えた。それで今の南無阿弥陀仏と刻んだ六字名号碑と代わった。それから雨乞いには、これを持ち出さないようになった。子供の引きつけには霊験があるといって参拝者が多かったという。この地蔵会式は毎年八月二十四日である。



地蔵堂



六字名号碑



⑤ 広瀬大明神（広瀬）

河合村川合にある広瀬ひろせにますわかうがのめのみこと坐和加宇賀売命神社は、もと、この広瀬にあった。それが大水で、ここから今の河合へ流れて行ったという。葛城川が曾我川か、どちらの川に流れたかはつきりしない。葛城川は天井川で土地より六尺ないし十尺ほど高い。それで堤防が切れて洪水となる。板橋が堤防より低くかけてあったので水が当たってよく橋が流された。昭和二十九年の水害で翌年川幅を二倍の広さに改修した。一説では新家から流れたともいう。



廣瀬神社（河合町）



広瀬の葛城川沿いの八皇子神社



広瀬の曾我川沿いの天神社

⑥くさ神井戸（弁財天）

櫛玉比女命くしたまひめののみことをまつる弁財天神社の境内の東南隅に一つの清水がある。俗にくさ神井戸という。子供の瘡苔病が発生するとこの井戸に詣って三日・五日・七日と日切り祈願をし、竹筒または新しい土瓶を携えて行つて清水を汲み、その水で日に幾回か患部を浸すと治癒するといふ。お礼参りに幅三十四センチ、長さ二十センチくらいの紙製ののぼりを何十本かこしらえ、井戸のまわりに立てて祈願を果たした。数キロの遠方からも参拝者が絶えなかつたといふ。



ここがのぼりを立てたという塚。現在井戸はない
後方の森が櫛玉比女神社

⑦ 弁財天（弁財天）

弁財天神社の祭神櫛玉比女命は、安芸の国宮島から飛んでござったとらう。



櫛玉比女命神社の戸閉祭（とだてまつり）

前方後円墳の後円部に本殿があり、古墳全体が神社の境内にある櫛玉比女命（くしたまひめのみこと）神社。10月31日、11月1日に行われる戸閉祭は、この古社で江戸時代より受け継がれる伝統の祭礼です。祭の時期が晩秋で寒いため、各家が戸を閉めて行ったことからその名がついたといわれています。10月31日の宵宮には、氏子4大字（南、萱野、弁財天、的場）のだんじりが鐘・太鼓もにぎやかに神社へ入る「宮入り」が行われ、その勇壮な姿に祭は最高潮を迎えます。（広陵町町勢要覧 2012）



南のだんじり



弁財天のだんじり



萱野のだんじり



的場のだんじり

⑧権現狸（寺戸）

大字寺戸に東垣内と権現垣内と裏町垣内の三垣内がある。特に権現垣内には、ごんげんたぬきが、しばしば出たという話が伝えられている。



寺戸地区（地区の南側にある馬見丘陵公園から望む）



寺戸旧小字三垣内地区（地区の北側の赤坂から望む）



⑨おんどり (寺戸)

寺戸の東の高田川の堤には通称「ランドリ」というところがあり、小字名は寺戸と大野の両方にまたがっている。さびしい場所でもここを通ると川堤に俄かに山が出来て通れなくなる。立ち止まってタバコに火をつけて休むと、スウと消えるという。これは、ここに住む狐狸にだまされるのだといっていた。



高田川の堤から広陵北体育館方向（小字ランドリ付近）を望む



高田川に架かる「おんどり橋」

⑩百済の宮(百済)

この地に「百済の大宮」という立派な都があった。それで百済には一条・二条・三条という地名が今も残っている。それは舒明天皇じゆめいの十一年七月のことで、範囲は飯高(檀原市)にまで亘っていた。百済川の西側の人々が奉仕に出て大宮を造ったといつ。



百済寺



百済寺
本堂大織冠



百済寺三重塔



⑪ 梵字の池 (百濟)

春日若宮神社の境内に百濟寺がある。その門前に梵字形の池がある。これは弘法大師の掘られた、あ・ばん・うんの三字池の一つだという。あの池は田原本町の秦楽寺じんらくじにあり、ばん字の池はこの百濟寺にあり、うんの字は田中なかつ（もと広瀬郡田中村）にある。ともに「三教指帰さんこうしき」を述べられた古跡として、池の中に三教島を築いている。また一説には今から二百年ほど前、百濟寺の住僧観心という者が、領主多武峯山坊に請い、梵字の頭にく点を付設した。梵字の誤りを訂正したものだといふ。



百濟寺の梵字の池



与楽寺の梵字の池
(元広瀬郡田中村、
現広陵町広瀬)



秦楽寺の梵字の池
(田原本町)

⑫黄金堂（百済）

小字淵口の西北百メートルのところに黄金堂と称した堂があった。むかし、聖徳太子が法隆寺の伽藍がらんを建立の後、黄金製の大瓦三枚をここに埋められて、建てられたので黄金堂と名づけたという。そして土造の大門があった。その跡を大門堂という。これは中国や朝鮮の建築を真似して作ったもので、その一部分は鎮守の森に保存されていたが、いつのころか崩れた。今もなお黄金堂前とか、黄金堂西などの小字が残っている。



小字黄金堂前・黄金堂西付近（南側から望む）



⑬ 蛙鳴かずの池（南郷）

むかし、弘法大師が、この池を巡錫めぐりされ字園の神福寺に宿って学問をされていた。境内には禅池といって大きさ約一畝ばかり、年中水を湛え蓮が生い茂り多くの蛙がいた。ある晩、蛙の声がやかましく勉強のさまたげとなったので、大師は秘法をもって封ぜられた。それからこの池の蛙は「グーグー」というだけで鳴かなくなったので、蓮池を「蛙鳴かずの池」という。後にこの寺を「花の寺」とたたえ、「弘法大師の法興にゆかりも深き神福寺鳴かずの池に咲く花も今も昔も匂ふらん」と、子供たちは歌っていたらしい。



神福寺



神福寺境内の池

⑭南郷どん（南郷）

むかし南郷どんという、えらい人がいた。本名は喜多見五郎右衛門で慶長五年に南郷村に代官として赴任してこられた。南郷村は水が不足し早（ひでり）の年には村人が非常に困っているのを見て、大池を掘られた。池は六町歩の大ききで場所は南郷村から西南に二十町離れた大谷村でそこから南郷村までの水路も同時に造られた。その際、南郷村から大谷村に池床替地として四町歩を渡させ、南郷村の耕作地の減る分については年貢を免除された。それからは南郷村は水不足になることもなく、順調に米を作ることができた。

南郷の人々は南郷どんに感謝し、ご恩に報いるために、村の中心部に供養塔を建て、現在に至るまで毎年、命日の一月二十五日とお盆に報恩の祭を行っている。

南郷どんは元和二年に喜多見若狭守勝忠として堺奉行となり、寛永四年に亡くなった。お墓は堺市の南宗寺にあり、南郷の役員は今も欠かさずお参りしている。



南郷池（大和高田市、近鉄大阪線築山駅北）



南郷環濠集落



中心部に建つ供養塔



前喜多見若狭太守花林宗珍大居士霊位

⑮ 若殿塚と奥方塚（南郷）

字城の内に俗に上の城というところがある。そこを南郷どんの屋敷跡とも塚ともいう。もと生駒石とツバキの木があり毎年正月に金のトビが来てとまったという。その西方の同じ字城の内の田の中を俗に下の城という。北を若殿塚、南を奥方塚という。これを南郷どんとその奥方の塚だという。奥方は大谷（大和高田市）から来た人だという。さわると腹痛が起きるといって誰もさわらなかつたという。



南郷城址（屋敷跡？）

⑩ 弘法井戸と雷（南郷）

園垣内の神福寺に清水の湧く弘法井戸がある。この井戸へ雷が落ちたので、弘法大師が封じられた。それで園の垣内だけは今でも雷は落ちないという。この井戸は南郷一番の清水で味があり、赤飯をたいたりお茶をたてる時には、この水をくみこくる習慣になっていた。水道施設が出来てから汲む人がだんだん少なくなったという。



神福寺

⑰ 六道山と後藤又兵衛（大塚）

徳川家康は大阪城を攻めたが、最初は大阪方に追い立てられて河内・大和の各地へ逃げまわった。河内の国分の西、堅山から大和の六道山の太神宮まで戦場の区域はひろまって家康は六道山に逃れた。その状況を豊臣方の家来、後藤又兵衛が偵察に大塚へ六度やって来た。それでこの山を六道山とっていたが後に六道山と改めたという。家康が六道山にかくれたとのうわさがしきりなので、又兵衛は黒石（地名）から火をつけて山を焼き立てた。家康のかくれた所まで行くと焼けなかった。そこを小字名モエサシという。焼けて黒くなった所を小字黒石という。



六道山（公民館付近）



小字黒石付近（黒石公園）



後藤又兵衛



徳川家康



小字モエサシ付近を望む
（みささぎ公園から）

⑱ 相撲太鼓の鳴る所（大塚）

西川氏の裏に大塚という古墳がある。当麻蹴速たいまのけはやと野見宿禰のみのすくぬが相撲をとったところだという。それで旧正月前の大つごもりになると、相撲太鼓が鳴るのが聞こえたという。



大塚という古墳（藤山古墳）



藤山古墳（円墳：径 15m、高 2m）
（広陵町遺跡分布調査概報 1989 年「広陵町教育委員会」）（葛城市相撲館「けはや座」ホームページ）



「野見宿禰」と「当麻蹴速」の天覧相撲

①9 雷が落ちない所（安部）

喜福寺の境内に弁財天を祀った堂がある。弁財天をまつているので、この村には弁財天以上の美人が生まれないという。第一、これ以上の美人があれば生命をとられるといわれる。寺の前の石段は、法隆寺の人が寄付したものであるが、その代償として弁天池にあった橋を持ち去ったという。寺には弁財天女が守護しているので雷が落ちないという。



喜福寺

⑳ 中将橋（安部）

安部のバス停留場から一町東に中将橋がある。今はコンクリートだが、以前は土橋であった。むかし中将姫が奈良から当麻寺へ通われた時に橋の上で侍女と共にお休みになったと伝える。ここを流れている川を俗に中将川という（今の高田川）。また平尾にも中将川とか中将という地名がある。



高田川に架かる中將橋



中將橋の欄干



中將姫の像（葛城市当麻寺）

②1 中将地蔵（安部）

小字東中将・西中将という地名がある。この中将畑から一体の地蔵尊が現れた。それを今の横大路（横大道とも書く）に安置して中将地蔵と名づけている。中将姫の像だという。



中将地蔵堂

中将姫（ちゅうじょうひめ）

中将姫は、奈良時代の右大臣藤原豊成（ふじわらのとよなり）の娘で、幼くして母を失い、継母に育てられました。姫は継母から嫌われ、幾度も命を狙われ続けました。しかし継母を恨むことなく、万民の安らぎを願い「写経」や「読経」を続けました。そして姫の願いにより當麻寺に入り、當麻曼荼羅（西方極楽浄土のようすなどを表した図。）を織ることを決意し、百駄の蓮糸を集めて蓮糸を繰り、これを石光寺の井戸に浸すと五色に染まりました。その蓮糸を使い、一夜で一丈五尺（約4m 四方）もの曼荼羅を織り上げました。姫はその後も現世浄土の教えを説き続け、29歳の春に生きながら極楽浄土へ成仏したと伝えられています。（葛城市ホームページ）



②② 仏ヶ谷 (安部)

安部から別所 (香芝町) に越す坂道を仏ヶ谷 (ほとけだに) という。中将姫が当麻寺へお通いになった時、この坂を越えられるのに、疲労をおぼえられたので、いつも念仏を唱えられていた。そして生きながら極楽の定想を得て仏様になられたので、かく名づけたという。穗雷神社のあるところも字仏ヶ谷といい、浄土寺も山号を佛谷山とっている。



安部から別所 (香芝市) に越す別所街道の小字仏ヶ谷付近
(現西谷公園の東側)



小字仏ヶ谷にある穂雷神社



山号を佛谷山とする浄土寺

②③ 鐘畑 (安部)

字黒石を俗に鐘畑（つりがねばたけ）という。またフキヤともいい鐘を吹いた所といわれている。浄土寺の鐘もここで作られ、「明暦元年藤原末次云々」と銘があったが、大東亜戦争に供出したので今は現存しない。



小字黒石付近（現馬見南3丁目付近）



浄土寺（広陵町安部）

江戸時代、五位堂は鋳物産業が発達し、大和国を代表する近世鋳物師（いもじ）たちが活躍した町だそうです

②4 伝正寺(笠)

赤部にあつた高津笠城たけつかさじょうが没落してのち、郷土が帰農して現在の大字笠に住んだ。もと八戸しかなかった。それで笠の八軒屋と称した。ここに初めて伝正寺という東本願寺（真宗大谷派）の末寺があつた。後年改宗して箸尾の願乗寺（真宗本派）の末寺と鞍替えした。すると大谷派本山から本堂も没収して南郷の三軒屋へ移された。もと伝正寺といった名をひっくり返えて正伝寺と改名した。赤部の極楽寺には「伝正寺什物」と記された前机があつたといふ。



正伝寺

㊤ ナデシコの花（笠）

むかし、奈良盆地にナデシコの花が一つもなかった。それで中将姫が、ナデシコの種子を高田川の堤に蒔かれた。それから堤防に一面、毎年美しい花が咲くようになったという。そのナデシコの花は真紅で普通の種類のものとは少し異なっているという。



笠の堤防では紅いナデシコを見つけることができませんでした。（イメージ）



笠橋（中央公民館東）から高田川上流の堤を望む

②⑥ 八嶋神社 (笠)

この神社は大国主命を祀っている。もと山の神が八力所にあった。それぞれ島のような小丘をもっていた。それは、もとこの村は八戸しかなかったので八軒屋といっていた。それで一軒一軒氏神をもっていた。八社あったのを一所に寄せ集めて八嶋神社と名づけた。



八嶋神社

②7 夢想の地蔵（大垣内）

字大垣内に地蔵堂がある。間口一間半で、堂内に高さ二尺ばかりの地蔵像（木彫立像）がある。享保年間にこの安置仏が行方不明になったことがある。村民は知らなかったが、尼僧の知縁・知林の姉妹に夢のお告げがあった。河内の国春日の里に持ち去られたが、今は早く郷里の大垣内のもとの地蔵堂に帰りたいと申された。しばらくして春日の人が立像の地蔵尊を背負って来て、もとの地蔵堂へ安置せよとて尊像を置き辞し去った。これより村民は靈験のあらたかなるに感じ、尊信甚だ厚くなった。毎年旧暦七月二十四日は地蔵会式として一日間の休養をし、親戚故旧を招待して共に歡をつくす例としている。その賑わしさは、秋祭にまさり近郷の者で境内は満ちあふれる。



立山祭（8月24日）（広陵町指定文化財）



立山祭（たてやままつり）

専光寺（地蔵堂）で毎年8月24日に行われる地蔵盆の祭。地域住民によって行われてきた伝統の行事で、「作り物」を飾る。「作り物」は、公民館、新築の家、婚礼のあった家などを会場として、その年に話題となった出来事や有名になった人物を取り上げておもしろおかしく飾り付け、話題性を盛り上げるものである。これを立てないとフジイル（病気や事故が起きる）と言われ、近隣からも見物人が多く集まる。立山祭の由緒は、江戸時代に流行した疫病の身代わりとして立て始めたとする説や、中世「見立山武士」と呼ばれた土豪細井戸氏が元禄年間に武士の名残を偲んで武者人形を立てたのが始まりとする説など、さまざまに語り伝えられている。（現地案内板より）

専光寺（せんこうじ）

堂内に標題の室町時代の地藏立像や阿弥陀如来坐像、「太郎さん」と呼ばれ雨乞いに使われた一木彫の十一面観音立像が残されています。



②⑧ 千本櫓（赤部）

高田川の東沿いに小北稻荷神社がある。境内に玉垣をもって囲んだ中に櫓の密生するのがある。これを俗に千本櫓といっている。ここはむかし、柳生但馬守が剣術の練習をした所だと伝えられている。千本櫓の立札には「大神の御使いキツネの産所たりし所なり云々」と説明があったという。



小北稻荷神社



境内の櫓の木

②9 麦粉池むかいけ
(赤部)

麦粉池は、もと佐味田の領地であった。ここだけが他村の領地だったが、付近の墓地が開墾され田地になり、池水が必要になった。赤部と佐味田とは同じ戸長役場に属していたので、赤部が麦粉若干と交換したので麦粉池という名がついたという。



麦粉池



③〇安産の神様（斉音寺）

ハツゴンサン（またはハツボンサン）という小高い所がある。広さ三坪位が雑木が生え、上に石がある。お産の神さまといい、身ごもりの人が大つごもりに安産祈願のために砂を供えにゆき、安産した時には、また砂を持ってお礼参りしたという。この村には西の方にもう一カ所ハツゴンサンという所がある。松の大木があるが安産に関する民間信仰は何も伝えられていない。



斉音寺周辺（県道大和高田斑鳩線から北方向を望む）



斉音寺周辺（斉音寺公民館）

③1 巢山の神木（斉音寺）

巢山古墳の後円部にある石室の前に神木がある。俗にカタツゲバといい、木を伐ると青い血が出るという。葉は琵琶の葉に似ていて火にあぶると、ふしぎな形があらわれる。この塚はその時代に非常に大きな勢力を持っていた人の御墓といわれ、神木はその霊が宿っているのでただれると誰もさわらないという。



巢山古墳



③② 大塚の大蛇（齊音寺）

巢山古墳の濠に大蛇がいて、それが新木山古墳に通っていたという。大蛇は黒と青竹色の二つが棲んでいて、唐傘ほどの太さがあるといわれる。その通行したあとには草が倒れていたという。



寺戸南付近から巢山古墳～新木山古墳方向（南西方向）を望む



新木山古墳



巢山古墳

③③ 麦飯宵宮（斉音寺）

斉音寺の天神神社を麦飯宵宮という。むかし小宮であったので祭典がなかった。すると「麦飯でもよいから祭をしてくれ」と神様のお告げがあり、村人の夢枕に立たれた。それで麦飯宵宮といっている。

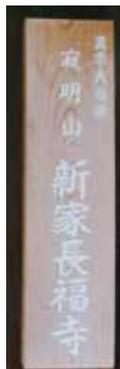


天神神社（穂雷神社）



③4 徳川家康からもらった檜（新家）

新家の長福寺を別院とよんでいる。もとこの別院は字古御堂（ふるみどう）にあつた。それを移転したという。徳川家康から八町四面の寺の領地をもらい寺を建てたといひ、その時、手植えのヒノキの大木があつた。



新家長福寺
「桜御坊」と言われ八重桜、藤、牡丹の名所です。

③5 讚岐神社と竹取翁 (三吉)

かぐや姫

「今は昔、竹取の翁というものありけり…」で始まる「竹取物語」(平安時代作者不詳)に登場する竹取翁の出身部族である讚岐氏は、持統く文武朝廷に竹細工を献上するため、讚岐国(香川県)の氏族齋部氏いんべしが大和国広瀬郡散吉郷に移り住んだものとしている。翁の讚岐姓は、「和名抄」の大和国広瀬郡に散吉郷があり、「大和志」では、「散吉郷廃存済恩寺村」として、現在の北葛城郡広陵町大字三吉の斉音寺集落付近に比定している。又この付近に「藪ノ下」、「藪口」、「竹ヶ原」という地名があり真竹孟宗竹等の竹林が多数残っている。三吉の北部には讚岐神社が鎮座し「延喜式」神名帳、広瀬郡の讚岐神社がこれに当たるとされる。

「竹取物語」の舞台が大和国であったことは、かぐや姫の求婚者であった五人の貴公子の名が、持統朝末期から文武朝初期にかけて朝廷の中心にいた五人の実在の人物に比定されることも符合する。

(資料) 奈良県史 (風土と文学)

読売新聞 (昭和六十一年三月十五日付夕刊)

出典… 讚岐神社現地案内板



讚岐神社



広島かぐや姫まつり

かぐや姫のまち・広島町では、毎年、中秋の名月の土曜、日曜日に「広島かぐや姫まつり」が開催されます。



作成 広陵町社会教育委員会議

千六三五―八五一五

奈良県北葛城郡広陵町大字南郷五八三番地一
広陵町教育委員会内

平成二十八年十二月

広陵町社会教育委員会議